

Editorial

今月号の特集について

稲葉 裕/大角晃弘

順天堂大学 名誉教授/公益財団法人結核予防会結核研究所 臨床疫学部

公衆衛生の研究・教育・実践の内容は、歴史的にも地域的にも少しずつ変化しており、新しい分野が次々に生まれています。少子高齢化が急速に進む日本にあって、人生最終段階の医療・ケアが公衆衛生の大きな課題となっており、この課題は、他の国々でも今後重要性を増していくことは疑いありません。

一方、これまでの公衆衛生学では、人間の老いと死の状態についてあまり明確な表現はされてこなかったと思われます。死は「疾病の予防、寿命の延長」の中に含まれて、公衆衛生全体の課題設定と評価において、統計処理の対象として重要な位置付けがされていますが、それ以上の突っ込んだ検討はされていません。最近の高齢者の死因統計で浮上してきた死亡診断における「老衰」の問題はその良い例でしょう。その根底にあるのは、死は避けるべきもの、否定されるべきものという考え方です。一方で、生命倫理や死生学で注目されてきている、どちらかという死は受容すべきもの、死へのプロセスのうちに医療・福祉に関わることで、より理想的な死を支えることが可能であるという考え方 (quality of death) があります。尊厳死を巡る法律上の問題や地域包括ケア、在宅医療、緩和医療、人生会議 (advance care planning) も、死を巡る公衆衛生と密接に関連しています。

本特集では、死に関わりのある分野や現場で研究・実践を重ねて来られた先生方に公衆衛生分野における死の捉え方についてご示唆をいただくとともに、課題の今後の展望についてご解説いただきます。まず、本特集の企画者 稲葉が公衆衛生における死の位置付けの歴史と現状について、特集全体の導入をしました。林玲子先生には、死亡および死因統計からわが国における最近の「死」の位置付けに示唆をいただきました。また、地域で看取するための地域包括ケアや病院および在宅における緩和ケアの課題と展望について、その前線でご活躍中の秋山正子先生と前野宏先生に報告していただきました。地域医療における臨床宗教師の役割や「死」を地域でノーマライズするコンパッション・コミュニティの考え方を谷山洋三先生にご紹介いただきました。さらに、「リビングウィル」、「医療安楽死」に関する国内外の現状と今後の展望について、北村義浩先生・岩尾總一郎先生、島田宗洋先生にまとめていただきました。最後に、医療関係教育現場における「死生学」導入の重要性と課題について植田美津恵先生に報告していただきました。本特集がこれからの公衆衛生と死について考える契機となることを期待しています。